

鑑賞学習と発達の関連表

<http://kanshokyoiku.jp/> 「鑑賞教育キーワードmap」資料 2015/1/10
 原案:奥村高明(平成20年告示の学習指導要領に基づく)

JSPS科研費基盤(B)24300315「美術館の所蔵作品を活用した鑑賞教育プログラムの開発」(平成24～26年度、代表:一條)

	小学1・2年	小学3・4年	小学5・6年	中学1年	中学2・3年
子どもの姿(発達の特性) 学習指導要領解説や言語活動資料を参考に記述。	低学年は、体感的に形や色などをとらえながら、気に入ったものを見る、感触を楽しむ、見つけたことを独り言のように言葉にすることができます。言語活動としては、主述を明確に話すことができれば十分です。	中学年は、形や色、組み合わせなど様々な感じをとらえて、「この動きがきれい」「この形が面白い」など印象と対象を分けることができます。言語活動としては、原因と結果、判断と根拠が言い分けられるようになります。	高学年は、形や色などから分析的に見たり、心情や気持ちを読み取ったりすることができるようになります。他者や社会の視点を取り入れて鑑賞することも可能です。言語活動としては、仮定や推論、演繹や帰納などの論理が使えるようになります。	中学1年は明暗の対比やリズム、構図などの造形要素が的確にとらえられるようになります。知識も豊富になり、作品を複数の視点から見るようになることができます。言語活動としては、論理を用いて相手を説得したり、異なる立場で議論したりできるようになります。	中学2・3年は、形の微妙な位置関係や色の性質など複雑な要素を分析の根拠としながら鑑賞できるようになります。自分の価値意識も確立し、美術の概念や働き、文化的な意味なども鑑賞の対象にできます。言語活動としては、分析や比較、検証など具体的な手法を意識しながら批評や解釈ができるようになります。
鑑賞対象 発達の段階に応じた鑑賞対象と、その広がり。学習指導要領 内容(B)鑑賞を参考に記述。	自分の身の回りの作品など ・自分たちの作品 ・身近な材料	自分たちの身近にある作品など ・自分たちの作品 ・身近な美術作品 ・製作の過程	自分たちが親しんでいる作品など ・自分たちの作品 ・我が国や諸外国の美術作品 ・暮らしの中の作品	美術作品など ・身近な地域の伝統工芸品、生活用品 ・日本や諸外国の美術作品、文化的な遺産	美術作品など ・自然や環境に含まれる美しさ ・日本の伝統的な美術や文化 ・諸外国や民族の美術や文化
鑑賞の方法 基盤になる主な学習方法。学習指導要領 内容(B)鑑賞を参考に記述。	見つけたことを話す 友達の話を聞く	自分の意見や考えを話す 話題にそって話し合う	論理やきまりなどを用いて話す 進行にそって計画的に話し合う	聞き手に分かるように説明する テーマをもとに討論する	調べたことを分かりやすくプレゼンテーションする 視点や根拠を明らかにしながら批評し合う
学習課題 それぞれの学年に妥当だと考えられる学習課題の水準。学習指導要領 内容(B)鑑賞を参考に記述。	・面白さや楽しさを味わう ・作品の感じに気付く	・よさや面白さを感じる ・作品の感じの違いが分かる	・よさや美しさについて考える ・作品の意図や特徴をとらえる	・見方や感じ方を広げる ・美術文化への関心を高める	・理解や見方を深める ・美術文化や美術の働きについて考える
キーワード 各学年で学習する主な内容や到達してほしい姿。	身体性 すぐに作品と一体化する 子どもは、彫刻や絵の中の人物と同じポーズをとります。例えば「考える人」を見たとき、そのポーズを真似ます。抽象的な作品でも体をゆらしたり、バランスをとったりします。これは子どもが作品と一体化し、体全体で鑑賞していることの表れです。作品と「対峙する」よりも、「同化する」に近いので、同じポーズをとってみたい、動きを取り上げたりするなどの手立てが有効でしょう。	中に入る 作品の中に入って見渡す 中学年の子ども達は、作品の中に入り込んで、作品が表す風景や空間を見渡すように鑑賞する傾向があります。子どもにとって、目の前の作品は、誰かが描いた「作品」というよりも、自分の目の前に展開する「世界」なのです。子どもの発言を「どこからそう思った?」と作品の具体的な色や形などに返し、根拠を明らかにしながら、作品という「子どもの世界」を豊かにしていくとよいでしょう。	造形要素 造形的な要素を取り出す 高学年の子ども達は、作品という対象から、色や形、マチエールなど造形的な要素を取り出して話すようになります。また、それらを根拠に、作品の意図や作者の気持ちについて考えることもできます。子どもに「どこからそう思ったの?」と根拠を明らかにしながら、造形的な要素とその効果の関係について具体的に話し合ってみてはどうでしょうか。	内省 自己と向き合う 中学生は、自分を他者の視点から見つめ直すことができるようになる年齢です。同時にそれは、他者の見方も尊重できるようになるということです。作品に自己を投影しながら鑑賞し、そこから自分の性格や特徴などについて考えたり、他者の発言から多様性について考えたりするなど、作品鑑賞の活動が自己との対話につながることで期待できるでしょう。	文化比較 美術文化の相違や共通性に気付く 中学2・3年生ともなれば、身についた知識や思考力を駆使して、様々な角度から作品をとらえ、鑑賞することができるようになります。鑑賞活動を作品だけにとどまらせる必要はありません。作品を通して「日本と諸外国の文化的な違いや共通性」「日本らしさとは何か」など文化について、あるいは文化財や文化遺産、さらには自然や環境、地理や風土などまで考える鑑賞が可能になるでしょう。
	直感 自分の感覚や活動からとらえる 子どもは視覚だけでなく、匂い、触覚、音、運動の感覚など全身の感覚を働かせて鑑賞しています。例えば、目の前に器があったとすると、「ざらざらしているな」と触った感じで見たり、「重そうだな」と持った感じをとらえたりしているわけです。鑑賞活動では、「手のひらにのせたらどんな感じ?」「どんな音が聞こえる?」など視覚以外の感覚も働かせてみましょう。	物語 作品から物語をつくる 中学年の子ども達は、見る活動や話す活動そのものが大好きです。作品から見つけたことをもとに、物語をつくりだすことも得意です。また、話し合いでは、友達の意見を取り入れたり、面白さをみんなと共有したりできるようになります。子どもの意見を束ねながら、協働して話を発展させる支援をすることで、驚くような物語が生まれるでしょう。	論理性 謎を考え、推理する 高学年の子ども達は、疑問を共有して話し合ったり、謎を解いたりすることが好きです。作品の置き場所を想像したり、作品が周りに与える影響を話し合ったりするなど、作品と環境の関係を考えることも可能になります。高度な解釈にならないように配慮しながら、「なぜ道が途切れているのか?」「ここに〇〇があったら?」など論理的な議論を楽しんでみましょう。	日本の文化 日本の伝統文化について考える 中学生は、文化、時代、歴史など、取り扱える材料が増え、複雑な思考ができるようになります。そのため、作品だけにとどまらずに、作品の背景にある文化について語り合ったり、作品を成立させる条件について議論したりできるようになります。この時期に、作品に表われている日本の伝統や、伝統文化がどのように自分達の暮らしへ影響を与えているかなどについて考えることは有効でしょう。	歴史と信仰 時代や歴史、信仰などの背景を想像する 中学生2・3年生は、作品の背景にある文脈を解釈の参考にして、作品の表している問題について深く考えることができます。「宗教と作品」「戦争と人間」など大人でも容易に答えが出せない問題について議論することも可能です。鑑賞活動が、美術の枠を超えて社会のあり方に広がったり、そこから人の生き方について考えたりする展開もできるでしょう。
	発見 見つけたことをすぐに言葉にする 「〇〇だ!」子どもは感じたこと見つけたことなどをすぐに言葉にします。それは、その子にとってかけがえない発見です。複数の子ども達がいると、その発見が短時間に連鎖するように次々と発生します。ただ、これを子ども達自身でまとめるというのは難しい年齢です。子どもの発言を「なるほど」「そうだね」と一つ一つを認めながら、それらの発言をつなげ合っていくことが大切です。	プロセス 制作の過程を味わう 中学年では、つくっている方法や様子などと作品の関係が理解できるようになります。また、制作の現場に立ち会って作者の手の動き、作品の変化などのプロセスを味わうこともできます。そこで、作品の制作過程を取り上げて「どうやって描いたのかな?」と想像したり、それがどのように作品に表れているかについて話し合ったりしてみるとよいでしょう。	昔の暮らし 伝統や文化などに気付く 高学年では、歴史や地理、社会や文化といった概念が成立します。それは、作品について考えるための材料や道具が増えて、鑑賞の対象が広がったということです。我が国や諸外国の絵や彫刻だけでなく、建築や工芸、デザインなどについて考えたり、作品には直接的に表されていない事柄や作品に関するエピソードなどを材料に議論したりするなど、鑑賞活動の幅を広げるとよいでしょう。	現代の社会 現代社会へのメッセージを受け取る 中学生は、世界史、環境問題、事件や時事などが広がります。そこで、作品に表われている色彩や構図などの造形要素と、作品の背景的な情報などを効果的に関連付けながら、現代の作品に含まれたメッセージや警句などを読み取っていく鑑賞活動が可能になるでしょう。	美術という概念 美術館や美術の働きについて考える 「これを美術として見る」という約束事、あるいは美術作品を成立させている美術館の制度など、美術は歴史的、文化的に形成された一種の概念です。中学生2・3年生ともなれば、そのことについて考え、自分の見方を問い直すことも可能です。複数の作品を関連づけて展示室全体の意図を考えたり、美術館の存在意義を話し合ったりするなどに挑戦してみてください。
用語 学習指導要領解説や教科書から抽出した鑑賞活動で用いることのできる用語の例。説明すれば概ね理解できる用語。	形、三角、四角、丸、線、色、ざらざらの感じ等	形の柔らかさ、色の冷たさ、組み合わせの感じ、重なり、前後等	光、風、質感、空間、奥行き、量感、方向感、直線、曲線、動き、バランス、色の調子、明るさ、鮮やかさ、形の配置、表現の効果、時代の違い、素焼き、多色版画等	平面、曲面、構図、塊、遠近感、立体感、混色、重色、ぼかし、にじみ、明暗の対比、リズム、色相、明度、彩度、有彩色、無彩色、補色、類似、対照、光の性質、装飾、構成、デザイン、工芸、建築、絵画、彫刻、和風、洋風等	マーブリング、スパッタリング、デカルコマニー、コラージュ、マスキング、ハーモニー、シンメトリー、美的秩序、色の感情、単純化、省略、強調、上下遠近、吹抜屋台、絵巻物、襖絵、屏風、時代の変遷、ルネサンス、印象派、アールヌーボー、シュルレアリスム、ジャポニズム、浮世絵、琳派、水墨画、文様、紅型、パブリックアート等